



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン (E-mail: daimao@travelmitra.jp)

ぼん子画

(570-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL: 06-6354-3011

## 「満月四人組デカン高原の旅Ⅲ 奇跡の再会②」

我々が市内のホテルに着いたとき、すっかり暗くなっていた。

ジャバルプルといっても、いわゆる「インド通」でなければ行ったことがないかもしれない。ここはチーク材の集散地であり、軍需産業の街でもある。

ジャバルプルの由来を説明しておこう。『ラーマーヤナ物語』に登場する司祭ジャーバーリの名前に由来するという。ジャーバーリは懷疑論的、あるいは唯物論的な見解をもったローカーヤタ派の思想家である。仏教では順世外道と呼ばれていた。

彼らは正統派バラモン思想が主張するアートマン（魂）の存在を否定していた。輪廻転生する主体アートマンを認めないので、当然ながら来世も認めない。人の行いによって生じる来世の善悪の果報も認めない。道徳や宗教も認めない。

神や仏はもちろんのこと、死んでも残る靈魂・個我・真我なんて迷信・脳内知覚だよ。死んだらそれでお仕舞いと言う人たちだ。“神さま大国”インドにも、このような超現実主義者がいたのである。

我々日本人が知るこの地方出身者の二人の名前を挙げておこう。

一人は、「超越瞑想」を西洋社会に広めたマハーリシ・マヘーシュ・ヨーギーである。彼は一時ビートルズに影響を与えたが、セクハラ事件のため関係が途絶えた。しかし“ある観点では”「瞑想産業」を輸出した貢献者でもある。なかなかの現実主義者であったと言える。

もっと、超現実主義者がいた。「和尚」ことラジニーシである。ジャバルプル西方180キロの村で生まれた。弟は今でもジャバルプルに住んでいる。本名チャンドラ・モーハン・ジェインが示すようにジャイナ教徒の家族に生まれ、哲学の講師をしていた。

ジャイナ教では、アヒンサー（不殺生）などの厳しい五戒を守らなければならない。遵守に行者と信徒に殆ど差異がない。

ところがラジニーシは、肉食、マリファナ、フリー・セックス、何でもOKな教祖であった。正に超現実主義者である。

しかし“ある観点では”保守的なインド社会に反逆した思想家である。インド人と

しては珍しく「老子」や「禅」を取り上げヒンドゥーの枠を破った。  
(全く異端の男だね。ジャーバーリの生まれ変わりだよ)

これから、わが輩が語ろうとする親子は、正にヒンドゥー保守派の理想的モデルである。これを語るには、やはり『ラーマヤナ物語』から入らなければならない。なぜなら、ジャーバーリこそ名脇役だからある。

王位争いに巻き込まれた王子ラーマは、義母の陰謀により父王から追放を宣言され、十四年間放浪する約束をした。ところが父王の死によって、帰還し王位に就くようにジャーバーリから懇請されたのである。そのやり取りを紹介しておこう。

「王子よ。だれでも自分のために生きている」

(そうだ。宗教家もボランティアも、子犬だって結局自分が”最初“だよ)

「王子よ。父王との約束など意味がない。そんな道徳は捨去れよ」

(といわれても・・・)

「父母のことで思い悩む必要はない。王子よ」

(うーん。そうかな・・・)

「死をもって万事終るのだ。王子よ」

(これは数多ある真理の中で決定的な真理だ。そうだよね、読者諸氏よ)

現実的にはジャーバーリに理がある。ラーマは王位に就いて国を統治し民を平安に導くべきであろう。ところがラーマは小さな約束を守るため放浪の旅にでてしまった。

この物語は「インド武士道・道徳編」とも言うべきもので「約束の実行」が賞賛されている。それにしても、二千年程前に編纂されたフィクションを、なぜ現代インド人は後生大事に愛読するのだろうか。

(理解できるかい？ 読者諸氏よ。あれは一種の童話だよ)

もっと理解できないのは、それを真似るといえるのか、準じる親子が現代にいることである。

先月号で、親子の正体を一気に語り尽くすと明言したが、さらに紙面が必要なようだ。乞うご期待。